

喜三の庭

長唄 全詞章

杵屋勝三郎 節

別題「君の庭」

資料の題名『君の庭』

〔三下り〕 牡鹿鳴く此の山里と詠みたりし、嵯峨野の秋の月の夜に、露の千種を踏分けて
宿直姿の藤袴、駒ひきとめて休らへば、夫としるべの松風に、通ふ爪音身にしみて、合はす
音色の笛竹や

月の前の調は、夜寒をつぐる秋風、雲井をわたる雁がねも、琴柱に落る声々に

〔本調子〕 想夫恋の曲は、比翼の翅を恋ひ、盤渉調の調は、連理の枝に通ふ

これはかしこき君が代に、わりなき中のひとふしを、諷ふも同じひと夜の君が、情にひかれて
尋ねくるはの通ひ路に

七百年も昨日今日、菊のきせ綿うちかけに、桔梗刈萱女郎花

店清搔の音につれて、色香あらそふ出立ばへ、萩の錦がふくめる露の玉揃い

末は籬にせかれても、格子を覗く月影に、招く尾花の忍び音は、実には面白き仙境なり